

白沢地藏堂の真実

栃木県立博物館 副館長 江田 郁夫



「白沢地藏堂の伝説」を記した看板

宇都宮の市街地から北東に約10キロ、西鬼怒川の西岸に近世奥州街道の宿場町の面影を今もとどめる白沢の町並みがある。坂を下つて町並みに入る手前には、地藏菩薩を祀った地藏堂があり、境内には「白沢地藏堂の伝説」を記した看板が掲げられている。それによると、鎌倉時代に源頼朝(1147～99)から奥州総奉行に任命された伊沢家景が、東北に赴任する途中、この地(白沢稚児ヶ坂)で子どもが病死し、その供養のために墓碑の五輪塔と地藏堂が建立されたという。つまり、白沢地藏堂は、旅の途中で早世した幼子(稚児)の冥福を祈つて鎌倉時代に祀られた地藏菩薩に由来し、地藏堂から南東約2キロ手前の坂道は現在も稚児ヶ坂とよばれている。

見逃せないのは、伊沢家景が実

在の幕府御家人だったこととで、頼朝が1189年(文治5)に平泉(岩手県平泉町)の奥州藤原氏を滅ぼした(奥州合戦)のち、頼朝の命で東北地方の支配にあたった。具体的には、陸奥国(奥州とも、現在の青森・岩手・宮城・福島県)の行財政を主導すべき国司が

現地に不在のため、その代官の職務(留守職)全般を担当した。頼朝から陸奥国留守職に任命された家景は、鎌倉から現地の多賀国府(宮城県多賀城市)へと下り、以後、留守職は家景の子孫に世襲された。戦乱で荒廃した奥州の復興を民生面からすすめた家景は、平泉に下向して現地の御家人を統率した葛西清重とともに奥州総奉行とよばれた。

興味深いことに白沢は、江戸時代以前の中世にも鎌倉と奥州を結んだ主要街道・奥大道の経路上に位置していたと考えられる。たとえば、室町時代に成立した軍記物語『義経』では、兄頼朝に合流するため平泉を出発した義経は下野に入ったあと、「きつ川(喜連川)を打過ぎて、下橋の宿に著いて、馬を休ませて、絹河の渡し



白沢地藏堂境内の五輪塔(稚児の碑)

て、宇都宮の大明神を伏拝み参らせ」、武蔵・相模を越えて、伊豆でようやく頼朝との対面を果たしている。下野を南下した義経は、喜連川(さくら市)を過ぎて下ヶ橋(宇都宮市)の宿場で一休みし、現在の西鬼怒川を渡つて宇都宮大明神(現二荒山神社)に参拝したという。西鬼怒川を渡河した義経は、当然、白沢をおつて宇都宮に到着したとみられる。したがって、義経とは逆ルートで奥州へと下つた伊沢家景は、宇都宮出發後に白沢宿で休憩をとり、つづいて西鬼怒川を渡ったことだろう。

登場人物・奥州下向の経緯・通過ルートの手がかりが当時の史実と齟齬がなく、くわえて家景本人は、そのころ一帯を支配していた宇都宮氏の一族でもあった。以上の点を勘案すると、「白沢地藏堂の伝説」は伝説どころか、まさに実際にあったことなのかもしれない。